

英国の Public Schools に関する一考察

広 永 周 三 郎

英国の私立中等学校 public schools は、その一握りの卒業生が社会の指導的地位の多くを占めていることでよく知られているが、この public schools については、永年にわたり賛否両論がはげしく戦わされて来た。これを是とする者は public schools 独特の教育方針を激賞し、これを否とする者は public schools が階級差別をますます助長すると言って非難する。一体 public schools はどのような教育を行ない、どのような影響を社会に及ぼしているのだろうか。

他の国では public school は公立学校を意味するが、英国の public school は純然たる私立学校である。Public という形容詞が使われる理由として、*Oxford English Dictionary* は「私塾 (private school) に比べて、より一層公共性があり、また一般から広く生徒を募集するからである¹⁾」と述べている。さらに、同じ辞書は、特に19世紀以後の用法として、public school を次のように定義している。

applied especially to such of the old endowed grammar schools as have developed into large boarding schools drawing, from the well-to-do classes of all parts of the country or of the empire, pupils, who in the higher forms are prepared mainly for the ancient universities or for the public services, and to some large modern schools established

1) Originally, a grammar-school founded or endowed for the use or benefit of the public, either generally, or of a particular locality, and carried on under some kind of public management or control; often contrasted with a 'private school' carried on at the risk and for the profit of its master or proprietors.

with similar aims (大きな寮制学校に発展した古い、基本財産のある文法²⁾学校で、英国または英帝国各地の裕福な階級の子弟を集め、高学年では主として古代大学に入学するか、公務員になるための準備教育を行なうもの、および同様の目的で設立された大きな近代的学校)

Webster はもっと簡単に (a) any of various endowed secondary schools in Great Britain offering a classical curriculum and preparing boys esp. for the ancient universities or for public service (基本財産を持つ英国の中等学校で、古典的カリキュラム³⁾を組み、古代大学への入学、または公務員になるための準備教育を男子に施すもの) (b) a similar school for girls (女子のための同様の学校) と定義している。

しかし、一体 public schools は何校あるのか、どれどれの学校が public schools なのかということになると、これに明確な答をすることは非常に難しい。Public school というのは全くの通称であって、public school の看板をかけている学校は一枚もない。何々 School, 何々 Grammar School, 何々 College など⁴⁾というのが正式の名称である。

1961年10月、「実際何が public school なのか私は知らない。満足な定義を私に与えてくれた人は一人もいない⁵⁾」と議会で公言したのは、ほかならぬ時の教育大臣であった。

このように public school は百人百様に解釈されている。しかし、public school が何であるかを決めないでは、論を進めることが出来ないので、諸説の最大公約数ともいうべきものを求めることにする。

Public school という時、まず誰も頭に浮べるのは Charterhouse, Eton,

2) 発生当時はラテン語の文法を教えることを目的としたために、現在でもこの名が使われている。

3) ギリシャ語、ラテン語を主としたカリキュラム。

4) 例外として Christ Hospital という名の学校がある。

5) "The fact is I do not know what a public school is. No one has been able to provide me with a satisfactory definition." — *The Public Schools And The Future*, p. 37.

Harrow, Merchant Taylors, Rugby, St. Paul's, Shrewsbury, Westminster, Winchester のいわゆる 9 大 public schools⁶⁾ である。これは 1861 年に public schools に関する調査を政府から委嘱された Clarendon Commission が、その調査の対象としたものである。しかし、public schools をこの 9 校に限るのは勿論少な過ぎる。

1944 年に出された Fleming 委員会報告書は public schools を Headmasters' Conference または Governing Bodies' Association のメンバーとし、1968 年 Newsom 委員会報告書は Headmasters' Conference, Governing Bodies' Association または Governing Bodies of Girls' Schools Association のメンバーとしている。

Headmasters' Conference は 1869 年に Uppingham School の校長 Edward Thring が public schools を議会の干渉から守るために開いた校長会議で、この会議には前記の 9 大 public schools をはじめ 15 校が参加した。その後この会議は原則として毎年 1 回開かれ、参加校は次第に増加したが、現在そのメンバーは総数 200 を越えてはならないことになっている。この会議のメンバーになるためには、学問の水準が高く、相当数の卒業生を Oxford, Cambridge その他の大学に送り出していなければならない。

Governing Bodies' Association は public schools の理事会協会で、1941 年に設立され、そのメンバーは independent schools, direct grant schools⁷⁾ またはこの協会が適当と認めたものである。1969 年の会員数は independent schools 130, direct grant schools 65, その他 8, 合計 203 であった。⁸⁾

Headmasters' Conference と Governing Bodies' Association のメンバ

6) Merchant Taylors と St. Paul's は主として通学制の学校なので、これを除いた 7 校を 7 大 public schools とすることもある。

7) 公費の補助を受けない独立の学校。

8) 国庫から直接補助金を受ける学校。

9) *A Guide To English Schools*, p. 109. これらの数字は England と Wales に関するもので、Scotland と Northern Ireland は含まれていない。本稿における数字は特に指定しない限り、すべて England と Wales のみに関するものである。

一は相当重複しているので、両者を合わせても、その総数は 200 を余り多く越えない。

Governing Bodies of Girls' Schools Association は女子 public schools の理事会協会である。前記の 2 団体にこれを加えたメンバーは 1968年に 273¹⁰⁾であった。

しかし、このように public schools の数を 300 近くにするのは、一般通念に比べて多過ぎる。J. C. Dancy¹¹⁾ は 1963年における Headmasters' Conference のメンバー 197校を第 1 表のように分類し、このうち全寮制または一部寮制の independent schools 110 を public schools とすることを提案している。¹²⁾

第 1 表

Independent schools	120
全部または主として寮制.....	89
寮制, 通学制併用.....	21
全部通学制.....	10
Direct grant schools	66
一部寮制.....	34
全部通学制.....	32
Maintained schools ¹³⁾	11
合 計	197

Vivian Ogilvie は「英国人がその息子を public school に入れようと言う場合, 60 か 70, せいぜい 80 までの学校を頭に描く¹⁴⁾」と言い, Robin Pedley

10) *Public Schools Commission First Report*, 1968, Vol. 1, p. 23.

11) Master of Marlborough, former Headmaster of Lancing.

12) *Public Schools and the Future*, p. 37.

13) 公立学校または公費で運営されている学校。

14) But at present it is still true that when anyone in normal conversation refers to a public school education or a public school man, he is thinking of the full-blown public school. And if he says, 'I should like my son to go to a public school,' he has in mind one of sixty, seventy or perhaps eighty schools. —*The English Public School*, p. 8.

は「一般に public schools と思われているのは Headmasters' Conference¹⁵⁾のメンバーのうち約 80 の比較的大きい私立寮制男子校である」と述べている。

池田潔慶応大学名誉教授は、もっと少ない数を挙げ、public schools の主要なものは England 31, Scotland 4, Wales 0 であると書いて¹⁶⁾いる。

このように、一般通念の public schools は Fleming 報告や Newsom 報告が挙げている数よりはるかに少ないが、政府筋の統計はこれを基礎としているので、本稿でも、統計に関する限り、これに従うことにする。

ここで public schools が英国中等教育制度の中で、数字的にどのような位置を占めているかを概観しておこう。

第 2 表 : England と Wales における各種中等学校¹⁷⁾

	男子校	女子校	共学校	合計
Public schools	130	140	3	273
Public schools 以外の優良と認められている independent schools	120	243	111	474
それ以外の independent schools	133	106	295	534
Direct grant grammar schools	82	95	2	179
Maintained schools	1,201	1,209	3,319	5,729
合 計	1,666	1,793	3,730	7,189

第 3 表 : England と Wales における各種中等学校生徒¹⁸⁾

	男子	女子	合計	百分比
Public schools	57,405	34,867	92,272	2.9
Public schools 以外の優良と認められている independent schools	26,577	50,341	76,918	2.6
それ以外の independent schools	15,448	17,220	32,668	1.0
Direct grant schools	51,846	49,063	100,909	3.2
Maintained schools	1,456,093	1,376,758	2,832,851	90.3
合 計	1,607,369	1,528,249	3,135,618	100.0

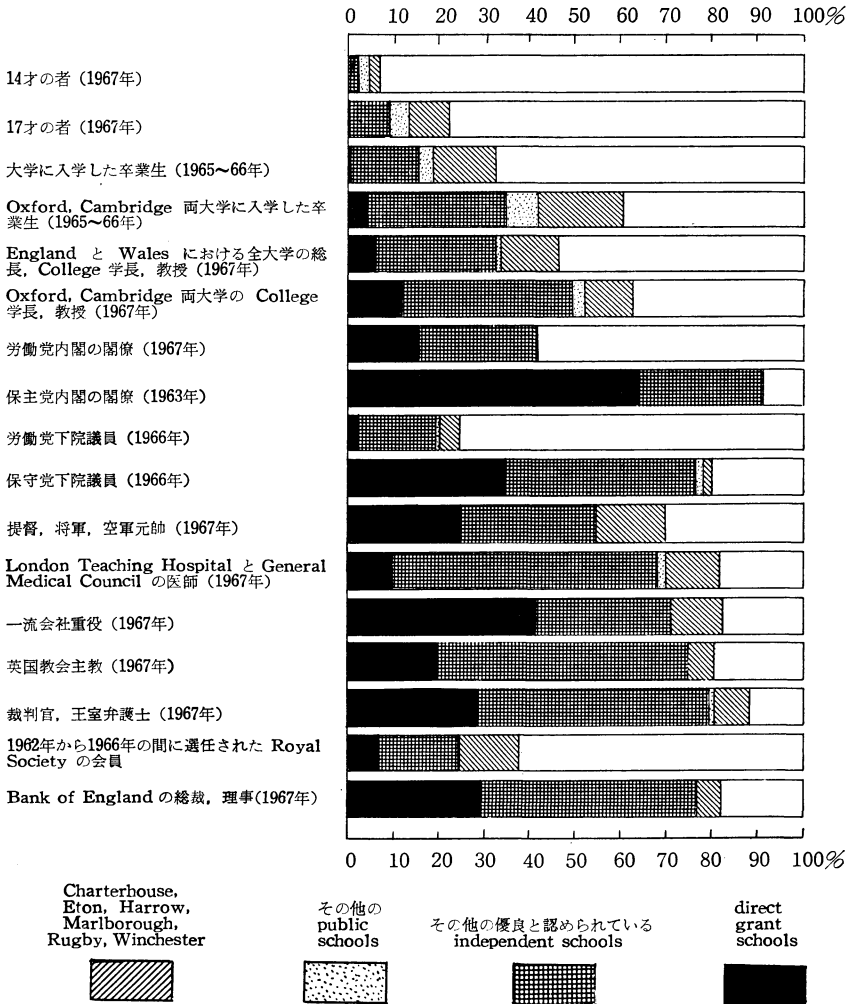
15) But the schools which people have in mind, however vaguely when they use the term, are in fact the bigger, independent boys' boarding schools, about eighty in number, which are represented on the Headmasters' Conference. — *The Comprehensive School*, p. 161.

16) 岩波新書「自由と規律」p. 10.

17) Source: *Department of Education and Science Returns for January, 1967*.

18) 同上

Public schools の数を一般通念よりはるかに多い 273としても、その生徒数は全体の2.9%に過ぎない。それにもかかわらず public schools の卒業生は政界、官界、司法界、学界、軍隊などで圧倒的な地位を占めている。次の図表はこれを雄弁に物語っている¹⁹⁾。



19) Public Schools Commission First Report, 1968, Vol. 1, p. 59.

- (注) 1. 卒業生には Scotland の public schools の卒業生 も含まれている。しかし、在校生には Scotland の public schools の生徒は含まれていない。含まれていたとしても大勢には影響がない。
2. Royal Society は英国の学士院で、会員は主として一流の科学者である。

高等文官試験合格率を例に取ってみても、public schools の出身者は1936年 35%、1956年 39%、1963—67年 43%と漸次増加している。1963年から1967年まで5年間の外交官試験合格者中、public schools 出身者は88人で、maintained schools 出身者 27人、その他の学校の出身者 26人を断然引離している。²⁰⁾

Public schools の中でも Eton 出身者の政界における活躍は特に目ざましく、Walpole²¹⁾ から現在まで46人の首相のうち18人までが Eton 出身者である。²²⁾

Eton に次いで政界に重きをなしているのは Harrow, Rugby, Winchester などで、Harrow は Churchill, Baldwin 両首相の母校として名高い。

Public school の最初のもは、Oxford 大学 New College の予備校として、William of Wykeham が1382年に設立した Winchester College であるとされている。次いで1440年に Henry 6 世が Cambridge 大学 King's College の予備校として Eton College²³⁾ を作った。

両校とも、最初は70名の給費生を全国から募集し、これに主としてギリシャ語とラテン語を教えた。後に、学費を払ってその教育を受けたいという裕福な家の子弟が次第に増し、現在ではこのような生徒が²⁴⁾ Winchester に約500名、Eton に約1,100名いる。

16世紀から17世紀にかけて public schools が各地に続々と設立されたが、

20) *Public Schools Commission First Report, 1968*. Vol. 1, p. 58.

21) Sir Robert Walpole (1676-1745), 1721年から1742年まで首相。

22) *Eton—How It Works*, p. 17.

23) 正式の名は The College of the Blessed Mary of Eton

24) Winchester では Scholars, Eton では Collegers または King's Scholars と呼ぶ。

25) Winchester では Commoners, Eton では Oppidans と呼ぶ。

17世紀中頃から public schools は衰頹期に入った。生徒は教師に反抗し、授業中に足を鳴らしたり、歌を歌ったりした。辞書や地図や玉子を教師に投げつける者さえあった。教師は鞭で打ったり、放校したりして、これに対抗した。Eton でも Winchester でも Harrow でも幾度か反乱が起った。Public school は bear garden とあだ名され、入学志願者は減る一方であった。

この苦境を乗切するため、各校長は必死の努力をしたが、中でも最も成果を挙げたのは Rugby School の Thomas Arnold (1795—1842) であった。

1828年校長に就任した Arnold は(1)宗教と道徳、(2)紳士の行動、(3)知的能力開発を教育方針に打出し、みずから chapel で生徒に説教をした。また prefect 制²⁶⁾を活用し、上級生に下級生を取締らせた。彼の部下の教師たちが、後に各地の public schools の校長になり、Rugby の学風は全国に広まって行った。

Arnold の功績は、彼の死後 A. P. Stanley の *Life* (1844)、Thomas Hughes の *Tom Brown's Schooldays* (1858)、Matthew Arnold の *Rugby Chapel* (1857) などによって世に喧伝された。Rugby で Arnold 校長の教えを受けた Hughes は *Tom Brown's Schooldays* の中で Tom の父親にこう語らせている。

「勉強に身を入れよ、学校にやるのは立派な学者にするためだと息子に言おうか。いや、いや息子を学校に入れるのはそのためではない——ともかく、それが主な目的ではない。何故学校に入れるのか。一つには息子がそれを望んだからだ。もしあの子が勇敢で、世のためになり、真実を語る英国紳士でキリスト教徒になったら、私はそれで満足だ²⁷⁾」

26) 風紀生(寮の秩序を保ち、その運営を助けるため、寮長から任命された上級生)

27) "Shall I tell him to mind his work, and say he's sent to school to make himself a good scholar? Well, but he isn't sent to school for that.....at any rate not for that mainlyWhat is he sent to school for? Well, partly because he wanted so to go. If he'll only turn out a brave, helpful, truth-telling Englishman, and a gentleman, and a Christian, that's all I want."
—*Tom Brown's Schooldays* (Everyman's Library) p. 52.

Public schools の特徴の最大なものは寮制である。男子の public schools 130校のうち103校では、生徒の半数以上が寮に住んでいる。女子 public schools も140のうち80、共学 public schools 3校は3校とも、このような寮制である。

男子寮では一般に上級生が下級生を取締る権限を持ち、新入生は先輩のために茶を出したり、使い走りをしたりしなければならない。²⁸⁾ 規則に違反した生徒には、教師または prefect が six of the best などの体刑を加える。²⁹⁾ ³⁰⁾

近年このような悪習は次第になくなって行っているが、服装やマナーについて細かい規則を守らせている学校がまだ相当多い。また、スポーツを奨励し、これを精神鍛練の手段とすることは今でもさかんに行なわれている。「ウォータルーの戦いの勝利はイートンの運動場で得られた³¹⁾」ということわざがよく引合いに出される。

Public schools の長所として、最も客観性のあるのは教師対生徒の比率である。1967年に maintained grammar schools における比率が1:16.8であったのに対し、public schools での比率は1:11.6であった。³²⁾ Public schools の教師はほとんどすべて上流または中流階級の者で、Oxford か Cambridge 大学出身者が非常に多い。³³⁾

しかし、public schools の教育には長所とともに短所もある。自ら Cambridge で public school に学んだことのある池田潔氏は public schools の教育を次のように批評している。³⁴⁾

「一日二十四時間に亘る共同生活により、教師と学生、または学生相互の

28) 上級生のために仕事をすることを fagging といい、こうして使われる生徒を fag という。

29) 杖で6つ思い切り打つこと。

30) corporal punishment

31) The battle of Waterloo was won on the playing fields of Eton.

32) *Public Schools Commission First Report, 1968, Vol. 1, p. 27.*

33) *Public Schools and Private Practice, p. 79.*

34) 「自由と規律」 pp. 48~9.

間の緊密な接触によって常に人格陶冶の機会の生れること、この間におのずから責任、規律の確乎たる觀念の養成されること、また、このような境遇と年齢にある青少年に対して、『他人の釜の飯を食う』という俗句によって表現される、一切の自制耐乏の訓練が与えられること、以上はいずれも普通、その長所として挙げられる常識であり、改めて註釈を必要としない。しかし、その反面に、全体の利益のため個人の利益が犠牲に供せられる場合が無しとしない。すなわちその社会のもつ共同目的を守るために、それ自体の性質の如何を顧みることなく個性の主張が否定されることが少くないのである。よしんば積極的に否定はされないとしても、性質は異にするがそれはそれとして幾何かの客観的価値を持つ個性が、ただその社会を支配している諧調と相容れないというだけの理由によって、順調な発展を妨げられることがあり得る。今、かりに学校を一の社会単位とすれば、母校の名誉を高めることが一の共同目的として学生は訓練される。そしてイギリスのパブリック・スクールでは、個々の私を捨てて全体の共同の目的の貫徹に奉仕する精神を涵養する手段として、運動競技がもっとも重要視されている。当然、運動競技に秀でた才能をもつものに対しては、その才能を伸ばすため、あらゆる刺戟と奨励が与えられ便宜が供せられる。もとより運動競技を尊重することは望ましいことではあるが、これが往々その例を見られる如く、不均衡に度を過ぎ、他の一切を犠牲として強行される場合、そこに好ましからぬ問題を残すのである。」

さて、このような public schools への入学はどうして行なわれるのだろうか。Maintained schools と direct grant grammar schools の入学年齢は11才であるが、public schools の生徒は13才で入学し、平均5カ年在学する。

Eton の場合、給費生と一般生徒とは全然違った方法で入学する。給費生の数は全部で70名に限られているので、毎年平均14名が入学を許可される。入学試験は毎年6月に3日間にわたって行なわれるが、競争率が非常に高い。これにパスして入学すると、授業料が無料または非常に少ない上、秀才

の折紙がつけられる。しかし、このような給費生は数も少ないし、学力本位で選ばれるのであるから、むしろ例外的な生徒である。一般の生徒は、他の public schools と共通の入学試験 Common Entrance Examination にパスしなければならぬ。³⁵⁾ この試験は public schools と preparatory schools³⁶⁾ の代表が共同で問題を作成し、答案は各受験生の志望校で採点される。

Common Entrance Examination にパスすることは入学の必要条件であるが、それよりも、もっと大切なことは学校の寮の部屋を確保することである。そのため、Eton のような一流校には、男の子が生まれると、出生届をすると同時に、その足で学校に行き、入寮願書を提出する親もある。

Eton には各45名を収容する一般生徒のための寮が25ある。入寮願書はこのうちのどれかの寮の寮長³⁷⁾に出される。寮長は親と面接した上で採否を決め、承諾の場合には仮リストに志願者の名前を書き入れる。入学予定の年の6年前になると、仮リストに載っている子供の親の中の希望者8名に対し、寮長が入寮の確約³⁸⁾をする。この時、親は入学金21ポンドを支払わなければならないが、この機会に5年間の授業料を全部前払いする者もある。³⁹⁾

Public schools の授業料は学校によってまちまちであるが、大体年額500ポンドから800ポンドで、未熟練労働者の年収にほぼ等しい。Maintained schools は無料で教育しているのに、このように高い授業料を払ってまで、子弟を public school に入れるには、それ相当の理由がなければならない。

Public schools の少数教育、全人教育のよさと Oxford, Cambridge 両

35) Winchester だけは独自の入学試験を行なっている。

36) Public school 入学志望者の大部分が、8才から13才まで入学準備教育を受ける私立学校で、寮制のものが多い。

37) House Master (寮の運営と寮生の教育の責任者)

38) 勿論、子供が6年後 Common Entrance Examination にパスしなければ、この約束は無効になる。

39) 授業料を前納すると、若干の割引がある。万一、入学できなかった場合、この前納金は返される。入学しても、途中で退学すると、残りの期間の授業料は返してもらえない。

大学へ比較的入学しやすいことが理由の一つであることに間違いなからう。しかし、それと同等、あるいはそれ以上に大切なのは public school 卒業生が、いわゆる Old Boy Net²でしっかりと結びついているために得られる、社会に出てからの利益であろう。

T. W. Bamford はその著 *The Rise of the Public Schools* の中で次のように述べている。⁴⁰⁾

「不思議なことに、(public schools の) 生徒と親の多くに取って、使った金の最も確実な効果は、教育的意味での学校とは何の関係もない。Public schools の生徒が、ほかの学校の同じ能力の生徒に比べ、社会に出た時、はるかに有利なことがその効果である。」

Harrow をテーマにした H. A. Vachell の小説 *The Hill* では、息子を Harrow に入れた百万長者の父親の心境が次のように書かれている。

「わしはお前をハーローへやるのは、書物や運動の勉強にやるのではない。ハーローの生徒達を勉強にやるんだ。そうした人達は将来お前と同様、一人前の立派な人間になるんだが、その連中を一つしっかり研究してもらおう。……忘れるな。一人の敵は味方が二十人かかっても償うことが出来ぬような損害を与えるものだ。金にはけちけちするな。服装にもよく気をつけて、潮流に乗って泳ぐんだ。逆らっちゃ駄目だよ。」⁴¹⁾

こうした雰囲気⁴²⁾で育った Old Harrovians の堅い結びつきを最も単的に表わしているのは Harrow 出身の Stanley Baldwin が1923年にはじめて首相の印綬を帯びた時のエピソードであろう。この時まず彼の脳裏に去来したのは母校 Harrow の名を恥かしめない内閣を作ること⁴³⁾であった。それ以前

40) ...strangely enough, for many of the boys and parents the most solid return for the money spent has nothing to do with the school in any educational sense. It refers to the greater chances in life enjoyed by public-school boys over boys of equal ability educated elsewhere—— pp. 318-9.

41) 池田多助訳「丘」p. 41.

42) Harrow 出身者。

43) "One of my first thoughts was that it should be a government of which Harrow should not be ashamed."——*Anatomy of Britain Today*, p. 198.

の内閣に Harrow 出身者が5人いたことがあるので、Baldwin はこれに負けないようにしようと思って、わざわざ自分が大蔵大臣を兼任し、Harrow 出身者の占める閣僚のポストを6つにした。⁴⁴⁾

Public Schools and Private Practice の著書 John Wilson が public school の教師になった時、大金持でその学校運営の実力者が Wilson に出身校をたずねた。彼が「Winchester です」と答えると、その実力者は「やあ、結構結構、君なら大丈夫」と言い、その後も絶えず「ああ、そうとも。いい男だよ、Wilson は。非常に有能だ。Winchester 出身だからな」⁴⁵⁾と無条件に彼をほめた。Wilson はこれに似た経験がほかに何度もあったと書いている。

Evelyn Waugh の *Decline And Fall* の主人公 Grimes はこう言っている。

「いいかね。俺はパブリック・スクール卒業生なんだぜ。こいつが大変なことなんだ。イギリスの社会には、パブリック・スクール卒業生は決して餓鬼道には陥さないという有難い掟があるんだ。どの道、人生が地獄の苦熱としか思えないあの年頃に、四年か五年、パブリック・スクールで地獄の経験を済ましておけば、あとはこの社会制度のお蔭で、どうにかやってゆけるというわけさ。⁴⁶⁾」

このような考えを持ち、いわゆる public school accent で話し、社会の上層に蟠踞する特権階級の温床である public schools は、しばしば激しい非

44) "I managed to make my six by keeping the post of Chancellor of the Exchequer for myself."—*The Prefects*, p. 3.

45) "Oh, good; well, you'll be all right then, anyway." "Ah, yes, Wilson, a good chap, very able: went to Winchester, you know." pp. 11-2.

46) "...you see, I'm a public-school man. That means everything. There's a blessed equity in the English social system that ensures the public-school man against starvation. One goes through four or five years of perfect hell at an age when life is bound to be hell, anyway, and after that the social system never lets you down." — *Decline And Fall* (Penguin Books) p. 28. 池田潔訳による。

難の対象となった。Public schools の弊害を除き、これを公立学校制度の中に取り入れる方法を検討するため、30年前に Fleming 委員会が、数年前に Newsom 委員会が任命された。Fleming 委員会は public schools 入学者の25%を公立小学校卒業生から取り、これを無料で教育することを提案し、Newsom 委員会は public schools の寮設備の少くとも半分を、家庭の事情で寮に住む必要のある生徒に開放することを勧告した。

しかし、この両委員会の提案は、どちらも事実上ほとんど黙殺されてしまった。保守党政権も労働党政権も、なんら積極的な手を打とうとしなかった。保守党は勿論、public schools の伝統をくずすことに反対だし、労働党も public schools に労働者階級の子弟を入れ、その高い授業料を国が負担することを喜ばない。むしろ、国費を公立学校の改良に使って、public schools よりよいものにした方がよいというのが、基本的考え方である。Public schools は、いろいろな批判を浴びながらも、まだ当分ほぼ現状のまま続いて行きそうである。

Bibliography

- Bamford, T.W.: *The Rise of the Public Schools*. Thomas Nelson & Sons, London, 1967.
- Bishop, T. J. H.: *Winchester and the Public School Elite*. Faber And Faber, London, 1967.
- Burgess, Tyrrell: *A Guide to English Schools*. Penguin Books, 1969.
- Castle, E.B.: *A Parents' Guide to Education*. Penguin Original, 1968.
- Dancy, John: *The Public Schools and the Future*. Faber And Faber, London, 1963.
- Gross, Richard E. (ed.): *British Secondary Education*. Oxford University Press, 1965.
- Hughes, Thomas: *Tom Brown's Schooldays*. Everyman's Library, 1944.
- 池田潔「自由と規律」岩波新書 1971.
- Kalton, Graham: *The Public Schools: A Factual Survey*. Longmans, Green & Co., London, 1966.

- King, Ronald: *Education*. Longmans, Green & Co., London, 1969.
- Lambert, Royston: *The State and Boarding Education*. Methuen & Co., London, 1966.
- Lawrence, Bernard: *The Administration of Education in Britain*. B.T. Batsford, London, 1972.
- McConnell, J.D.R.: *Eton—How It Works*. Faber And Faber, London, 1967.
- Ogilvie, Vivian: *The English Public School*. B.T. Batsford, London, 1957.
- Pedley, Robin: *The Comprehensive School*. Penguin Books, revised edition, 1969.
- Public Schools Commission: *First Report*. Her Majesty's Stationery Office, 1968.
- Sampson, Anthony: *Anatomy of Britain Today*. Hodder and Stoughton, 1966.
- Skidelsky, Robert: *English Progressive Schools*. Pelican Original, 1969.
- Smith, W. O. Lester: *Education in Great Britain*. Oxford University Press, 1967.
- Snow, George: *The Public Schools in the New Age*. Geoffrey Bles, London, 1959.
- 空本和助「イギリス教育制度の研究」御茶の水書房 1969.
- Vachell, H.A.: *The Hill*. 「丘」池田多助訳 1959. (非売品)。
- Warner, Rex: *English Public Schools*. Collins, London, 1945.
- Waugh, Evelyn: *Decline And Fall*. Penguin Books, 1928.
- Wilkinson, Rupert: *The Prefects*. Oxford University Press, 1964.
- Wilson, John: *Public School And Private Practice*. George Allen & Unwin, London, 1962.
- Wolfenden, J.F.: *The Public Schools To-day*. University of London Press, 1948.